
混ぜられたセカイ

だるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混ぜられたセカイ

【Nコード】

N5854Y

【作者名】

だるま

【あらすじ】

1600年。

今から400年前、世界中で多くの人間が突然行方不明となった。原因も犯人も手段も全てが不明の怪奇現象。

人はこれを『神隠し』や『全世界転生』や『地球外生命体による侵略』等と様々な説を打ち立てているが、決定的な学説は未だ一つもない。

その中で最も人気のある都市伝説的説が『異世界への転生』である。

護身術に長けた剣の達人が異世界を東奔西走する話です。
主人公は落ちこぼれでもチートでもありません。程々に強いです。

プロローグ

一人でいることには慣れていた。

物心ついた時に両親を事故で失い、その数ヶ月後にたった一人の家族となった妹も行方不明となった。

不慮の事故と原因不明の事件により家族を無くした自分だが、今となってはその孤独さえ心地好い物となってきた。

強がりと言われればそれまでだが、生憎一人でいる時間が長すぎたのだ。

友達もいることにはいたが、形だけの物である。

『あいつは友達がいない』『家族もいなくて可哀相な奴だ』ただそう思われたくないが為に友達を作り、上辺だけ取り繕い、『自分は孤独だけれど可哀相な奴ではない』と世間に向かい声高に叫んでいたのだ。

既に中学に入る時にはそういった周りとは違う考えを持っていた事を覚えている。

周りにその事で優越感を得ていた事も覚えている。

そんな俺にも一つだけ打ち込む物があつた。青春と情熱を打ち込んだ物が。

それが刀だ。

我が一族は戦国時代から代々続く刀の名門だそうだ。初代様が生み出した流派が今でも受け継がれている。父も祖父も曾祖父もその流派を極めて来た。

父が死んだ後に自分の身を守る護身術として祖父に剣術を教わった。

そのせいか、中学で入った剣道部では多くの人にその才能を魅入られた。

中には羨望や嫉妬の感情もあつたが。

その剣道部で俺は一人の男に出会う。

後の親友となる男だ。

始まりは唐突だった。

「おいてめえ！」

中学三年間通いつめている武道館剣道場でいつもの練習メニューを終え、防具を片付けているといきなり背後から怒号が聞こえた。

訝しい顔で振り返ると学ラン姿の男が木刀を大上段へ振りかぶり今まさに俺の脳天目掛けて振り下ろそうとしていた。

いかなる事態でも冷静かつ慎重に行動をする事を心掛けている俺だが流石に慌ててその場を飛びのいた。

「お前が柳刃 仁やなぎはじんだな？」

「確かにそうだが襲うなら本人かどうか確認してからじゃないのか！？」

もしこいつが俺と間違えて誰かに襲い掛かってたと考えると背筋が寒くなる。

「うつせ！死ね！」

内容によつては話を聞かないでもないが、如何せん、聞く耳を持っていない。

しかも殺されなきゃいけない様な事が身に覚えがない。

剣道部の備品である木刀を構え特攻してくる学ラン野郎を眺め嘆息し、手元の竹刀を構え迎え撃つ。

来る者は拒む。ひたすら拒む。それが俺だ。

後に聞いた話によるとこいつが俺を襲ったのは完全な逆恨み、しかも恋愛事に関することだ。

動機から行動までたちの悪い奴である。

神島かみしまと名乗ったそいつは中学生にしては強いという程度だった。全中一位の俺には足元にも及ばない事は言うまでもないだろう。

そんな強烈な親友との出会いは俺の圧倒的勝利に終わった。内容については割愛させて貰う。むさ苦しい男（神島）が爽やかな青年（俺）になぶられる光景は痛快極まりないが、流石に忍びない。

何はともあれ、その男、神島 竜哉との出会いが俺の人生に大きな影響を与えたことは確かである。

それまで氷の様に冷たく、刀の様に鋭く尖っていた心は神島という灼熱の釜に放り込まれ瞬く間に溶けていった。

今となつては昔の自分はかなり恥ずかしい人間だったと思わざるを得ない。

両親の事故から神島との出会いまでの期間を反省と後悔の念を込めて俺は『暗黒時代』と呼んでいる。

神島は俺の暗黒時代にずかずかと土足で入って来ては俺の生き方をことごとく否定し、擦れ曲がっていた俺の人格は元に戻っていた。友達というものに関する考え方も変わり、今まで無駄にした時間の分を取り戻す為にもよく笑う様になった。

高校は神島と同じ高校へ通うことになり、今となつては神島は俺の親友となっている。

そんな高校二年のある日、俺の人生の分岐点その二に差し掛かったのだ。

人生の分岐点その二

蠟燭から漏れる仄かな明かりがこの無駄に広い剣道場を照らしている。

築何年だかわからないような古さをもつこの剣道場だが、度重なる改修によりなんとかその姿を保っている。

歴史の教科書で見た大政奉還が行われた二条城を思い出させる様な造りの剣道場の真ん中で刀を握り素振りを繰り返す。

心を無にし、一連の動作を素早く滑らかに、そして美しく。

額を流れる汗も周りを飛ぶ煩わしい蚊も外の林が風に吹かれざわめく音も全く気にしない。

暗黒時代は幕を開けたが、より冷静にいる事が大事という俺の考え方は変わらない。

常に心に一枚の薄い膜を張り、そこから内側は何者にも侵されない不可侵の領域だ。

「なあどう思うよ？ 2組のあの子、あんなチャライ奴と付き合ってたさあ。有り得なくね？ あの清純さが良かったのにあんなのと付き合ったらもう女の価値が大暴落だよな、ウォール街もビックリだよ」

剣道場の隅に携帯を弄りながらうるさい独り言を言ってる親友みたいな奴が居ても全く心を乱さない。

いくら俺が喧騒に満ちた中に居ようと、俺の中にある心は穏やかで

ある。

波紋一つ広がらず水面に鮮やかな満月を映す池の様な心なのだ。

「よし、終わりだ」

日課の鍛練を終え刀を腰の鞘に戻し、うるさい蚊を片手で握り潰しながら親友の元へ歩く。

「やってらんねーよなー、リア充死ねばいいのに」

先月新しくした畳に寝転がりぶつくさ言っているのは知っての通り、神島だ。

「そんなこと言っただって出来ないものは出来ないよ」

「これがモテる男の余裕ってやつか…」

神島は中学生の頃、好意を抱いていた女の子が俺の事を好きだったらしく、それが原因で俺を殺そうとして以来の付き合いだ。

こいつは外見自体は悪くないし性格だって何の問題もない。

どこと無く日本人離れた顔立ちはハンサムの部類に掠るレベルだし、性格だってクラスの女子から『よくわからないけど優しいそう』という評価を得ているのだ。

ただただ運が悪いのだ。

好きになった子が彼氏持ちだったり、転校してしまったり。

「妹がいたら紹介してたんだけどなあ」

剣道場の入口の上に立て掛けてある家族写真を見上げながら俺は言

った。

神島も事情を知っている為目を細め、そうだなあと言っている。

妹は俺が小学三年の時に行方不明になり今もそのままだ。

警察の搜索の成果無く、犯人も原因も何もわかっていない。

妹が居たという形跡として残っているのはこの家族全員が揃っている写真と俺の腰に差してある小太刀だけだ。

「もう日も落ちたし、ボチボチ俺は帰るわ」

「そうか、じゃあまた明日学校でな」

学校帰りに俺の家に寄り遊んで行くのは神島の日課となっている。

二人で剣術の練習をしたり、ゲームをしたり、くだらない話をしてりして盛り上がる。

昔の俺では考えられなかった事だ。

今ではそれが普通になり当たり前になり日常と化している。

人間変わろうと思えば変わるものということだ。

神島が入り口の扉に手をかけた瞬間。

フッ

部屋の中の蠟燭の火が消えた。

この広い部屋全体を照らすだけの数がある蠟燭の火が一瞬で消えた

のだ。

風が吹いた訳でもないのにだ。

「なんだ？」

神島も顔をしかめ周りを見回す。

その顔には不安とほんの少しの恐怖の色が混じっている。

日は完全に落ち、今日は朔月、月明かりもない。

辺りは完全に闇が支配している。

闇というのは人間の根源的恐怖の対象でありこればかりはどう足掻いても無理だ。怖いものは怖い。

その恐怖という感情故か俺は自然と左腰の刀に手を伸ばす。

「早く出よう、嫌な予感しかしない」

「だな。薄気味悪い」

俺の提案に神島も頷き、再び扉に手をかける。

「邪魔するぞい」

背後から何の前触れも無く声が聞こえてくる。

後ろを向くと一人の白髪男が立っていた。

白いローブに白いというよりは色が抜けた髪、顔には皺が目立つ。

どこからどう見てもただの老人だ。

「誰だ」

しかしただの老人とは思えない様な雰囲気を纏っている。

俺には相手を見ただけで戦闘力が数値化されて見えたりとか、相手の醸し出すオーラを見ることが出来るとか、そういう能力はない。だが、相手の目を見ればその人の強さというのが何となく分かるのだ。

そのおかげで今まで油断して負けるということとはなかった。

「わしはただのクリエイターじゃ」

予想通りだ。ただ者じゃない。

初対面で名前を聞きこんな突拍子もない事を言ってきた奴は俺の短い人生で未だ一人もいない。

初対面がかなりビックリランキング2位の座を授けるしかない様だ。1位はもちろん神島である。

「わかった。んじゃクリエイターさん、色々聞きたい事があるんだけど」

「一つだけならいいぞ？」

ええ……。一つだけ……？

不法侵入してクリエイター名乗って突っ込み所満載な外見して、もう言いたいことだらけなのに？一つしか聞けないの？

「じゃあ聞くけど、何か用か？」

この爺さんが油断ならないことは分かりきっている。
だから俺は刀の柄から手を離さない。

爺さんを倒す為ではなく、俺の身を守る為にだ。

「そこにいるわしの弟子を連れ帰りに来たのと、君にもちよつと用があつての」

「は？」

弟子？神島が？

そこで俺はようやく気付く。いつもあんなにうるさい神島がこんな異常事態にしては静か過ぎる。

隣を見ると神島は頭を両手で抱え込みうずくまっていた。

「おい、神島！どうした？」「案ずるな、失った記憶が戻って来たんじゃない」

「失った記憶？」

爺さんは畳に擦れる程長いロープを引きずる様にしながら歩いてくる。

俺はいよいよヤバい気がしてきた。イレギュラーな事態が重なり過ぎている。

この爺さんが何者かもわからないし、神島の失った記憶とやらもわからない。

情報を制するものは戦闘を制するが、今の俺には情報が全くないのだ。

「仁…逃げ…ろ…」

神島は必死に呟くが生憎親友をこんなヤバい状況で放置することは今の俺には出来ない。

そう、今の俺には。

「お前は先に行つてなさい」

爺さんが神島へ指を差すと神島の体が光出した。

暗闇に慣れはじめた目には強烈過ぎる光が剣道場を照らす。

「くあつ…！」

神島は小さく呻くと光は更に輝き神島の体の中心へ収束する。

そして、光が消えたと思ったら神島の体は既に跡形も無く消えていた。

「えっ…！？」

「さて、次は君だ。柳刃仁君」

呆然とする俺に向かい爺さんは指を差し出す。何で俺の名前を知っているのか気になったが最早それどころではない。

唯一無二の親友が目の前で姿を消したのだ。

両親、妹に続いて親友までも消えたのだ。

何の前触れも無く、いきなり現れたこの正体不明の自称クリエイターの爺のせいで、消えたのだ…！！

「てめえ…神島をどこにやった」

「元居た場所に返したまでじゃよ」

「……『柳葉無刃流壱ノ型』」

刀を握る右手に力を籠める。左足を引き腰を低くする。
一撃必殺の居合技、柳葉無刃流壱ノ型。

「柳葉無刃流は本来護身の為の流派じゃないのかね？」

「黙れ」

短く一言言い放ち刀を抜く。鞘に刀身を滑らせ加速させ、足の裏の皮が擦り切れる速さで爺との間合いを詰める。

横一文字。

確実に斬った感触はあったが、果たしてこの得体の知れない爺にどこまで効いたか？

振り向くと爺は目の前に立っていた。
右手をこちらに向けて。

「くそっ……」

吐き捨てる様に言った言葉と同時に体が光出す。

「見事な剣技じゃ。それだけの腕前があるなら安心じゃよ」

爺はホクホクと老人特有の穏やかな顔で頷く。状況が状況なだけに全く褒められた気がしない。むしろ、ム力つく。

「案ずるな、お主が行く所に龍哉もおる」

一体どこに連れて行く気だこのくそ爺め。

「お主の妹もな」

「なっ…!？」

行方不明の妹の所へ今から向かうってことか？

この爺に聞きたい事が山ほどあるが言葉が発せない。

「ふむ。わしの家もそろそろ畳にしようかの…」

俺が最後に見たのは、足を擦りながら新品の畳の感触を味わう爺だった。

人生の分岐点その二（後書き）

結構書いた〜って思っても案外書いてなかったりするものですね…

牢獄での出会い

床を通り伝わる冷やややかな感触。

寝るには硬い床で俺は目を覚ました。

正しくは意識を取り戻したというのが正解かもしれない。

「……どこだ？」

鈍い頭痛に顔をしかめながら上半身を起こすと、俺が寝ていたのは牢屋だった。三方を石の壁に囲まれ残りの一方は鉄の格子、紛れも無い牢屋である。

一体俺がどんな罪を犯したというのだろうか？
ここ最近で俺が何か悪い事をしたのだろうか？

思い当たる節は全くない。

突然現れた爺のせいで何もかもが狂わされたのだ。

「神島は……いないか……」

爺は神島と同じ所へ行くと言っていたが、牢屋の中からじゃ何もわからない。

一体俺が今、何故、ここににいるのかも。

「はっ！刀は！？」

牢屋に入れられるという状況なら当たり前かもしれないが、俺の愛

刀は腰から姿を消していた。妹の小太刀もだ。

思わずため息をつきそうになるが、止める。嘆いても仕方ない。取られた物は取り返すしかないのだ。

妹もここにいと爺が言っていた。幼くして突然消えた妹が。

しかし、ここを出ない事には始まらない。

俺は何かないか格子の近くに寄る。

「おはようございます。ようこそ帝国第七要塞地下牢獄004番へ」

帽子を被り制服をビシッと着込んだ男が牢屋の外に立っていた。

帽子から見える髪は銀色、瞳の色は輝く様な碧、顔立ちの整った色男だった。

恐らくこの男が看守なのだろう。

「帝国？要塞？つか、ようこそって何歓迎してんだよ」

とりあえず、先の疑問だらけの発言に対応することに。

「私はこの地下牢獄の看守を勤めているセリル・グネースと申します。以後お見知りおきを」

帽子を取り優雅に一礼してみせるセリル。牢獄にぶち込む人間に対してここまで丁寧に扱うとは一体どうということなんだ？

「ああ。ところで、ここはどこなんだ？」

「ふむ、その発言。やはり貴方は新参者のようですね」

「新参者？」

「おっと失礼」

俺が聞こうとしたところで廊下の右奥の扉が開く音がする。

「セリル、005番へぶち込め」

「了解しました。ですが、この傷は……」

「へっ、知った事じゃねえ」

どうやら新しく牢屋に入れられる様な人間が来たようだ。しかも怪我人。

再び扉が閉まる音が聞こえセリルともう一人の足音が廊下に響く。

俺の牢屋の前まで来たそれを見て俺は息を呑んだ。

セリルが連れていたのは羽の生えた何とも美しい少女だったのだ。

鮮やかな程美しい金髪、薄くエメラルドの様に輝く瞳、肌は滑らかに白いがところどころに生々しい傷や血がついている。

そして背中には白い羽が一枚、血に染まった白い羽が一枚だけ、寂しげに垂れていた。

もう一枚の羽がどうなったのかは想像に難くない。

何故羽が生えているのか、何がどうしてそうだったのか、わからない

い事しかない。

「この薬を使いなさい」

「……はい」

005番の牢屋にその子を入れ塗り薬の様な物を渡したセリルは再びこちらへ戻って来る。

「郊外の戦闘に巻き込まれたようです。酷いものですよ」

「何で被害者を牢屋に入れるんだよ!」

「下っ端は黙って従えば良い。このルールですよ」

だからってそんなのおかしい。まだ言ってやりたい事はたくさんあったがセリルの辛そうな顔を見てその言葉を飲み込む。

「…色々聞きたい事がある」

「答えられる範囲でなら、喜んで」

俺はその場に胡座をかきセリルを見上げながら言つとセリルは近くの椅子に座り答えた。

「さっき言つてた新参者ってのはなんだ?後、ここはどこだ?」

とりあえず確認しておきたいことだ。爺に会ってからわからない事だらけだったがいい加減知りたい。

「その前に質問です。貴方は地球からやって来たのですね?」

「…待った、その言い方だと…」

「ここは地球ではありません」

やっぱりか。というのがまず思った感想だ。日本人にこんな銀髪の男はまずいないだろうし、帝国何て言う大仰な名前をつけている国は地球にはもう無い。

おまけに地球に羽の生えた少女がいるなんて見た事も聞いた事もない。

結論はここは地球ではない、ということだ。

「ここはアミストレアと言う星のムガルト帝国という国です」

「そこに新しくやって来たのが新参者って訳か？」

「そついうことです」

これは想像以上の展開だ。あの爺、なんて所に飛ばしてくれやがった。次あつたら確実にぶん殴る。

「それぞれの種族には貴方という地球の様に故郷があります。そこから何故かここに飛ばされた者を新参者と呼んでいるのです」

ならば俺と同じ境遇の奴らがたくさんいるという訳か。妹がこの星にいるのも頷ける。

「ここアミストレアには大きく分けて4つの種族がいます。1つは魔人、魔法という独自の能力を使い天変地異、森羅万象、風林火山となんでもありの種族です」

なんだそのチート種族。てか魔法っておい。俺にも使えないかな。

「2つ目は獣人。文字通り獣と人の中間種族です。身体能力は4種族の中で最も高いと言われています」

この世には猫耳属性まであるのか。地球の男が聞いたら宇宙開発命懸けでやってこの星見つけてくれるんじゃないか？

「3つ目は貴方方、真人間。特に秀でた能力はありませんね」

「謝れ」

「すみません。4つ目は隣の方の様な鳥人。翼を持ち大空を自由に羽ばたけます」

なるほど、彼女は鳥人なのか。だけど片翼じゃ飛ぶことは出来ないだろう。

翼を無くした鳥人、余りに酷いな。

「彼女の翼なんとかならないのか？」

小声で聞く俺にセリルはあくまで冷静に答える。

「それぞれの種族の里という物があり、鳥人の里に行けばもしかし

たら……」

「ここから出してやれないのか？」

しかしそこでまた廊下の扉が開く。セリルは椅子から立ち上がり右へ姿を消す。

再び女の子のようだ。

「ちょっと！触ないでって！」

「うるさい！さっさと歩け！セリル、006番だ！」

「了解しました」

「もう！なんなのよ！」

続いて現れた女の子はまさに獣人のネコの女の子だった。

明るい茶色の髪の間隙から生えたネコ耳はピクピクと動き尻尾は優雅に揺れている。

綺麗な灰色の目は活発な印象を与える。

「首尾はどうですか？」

「問題ないよ、マスター」

何やら小声で会話しているセリルとネコ少女。もしかしたら知り合いなのだろうか？

「ちょっとこの子の手当てをしていてくれないか？」

「うわ、酷い傷！大丈夫？」

「はい、なんとか…」

セリルはネコ少女を005番に入れて鳥人の彼女を介抱させている様だ。勝手なこととして大丈夫なのだろうか？

「アンタ、色々と俺に教えてくれてるけど大丈夫なのか？そこら辺の規則とかないの？」

先程から気になっていた事だ。仮にも牢屋の中と外にいる人間同士だ。勝手に交流して良いものなのだろうか。

「ご心配には及びません。もうこの看守も辞めますから」

ニヤリと不敵な笑みを見せるセリルに俺は何となくだが親近感を感じた。

こいつのこの目は俺の敵じゃない。

「貴方、隣の子を出せないか？と聞きましたね？」

格子に顔を近づけ声を抑えて言うセリルに無言で頷く。

「見ず知らずの女の子を助けたいと言う訳ですね。名前も知らない女の子を」

「出来るなら俺もここから出して貰えたら嬉しいかなあ」

大体なんで俺牢屋に入れられてるんだよ。何もしてないのに。

「貴方がこの星に来てから今日で4日目です。実は貴方を助けて欲しいと依頼を受けて今私はここにいますよ」

「俺4日も寝てたのかよ……。誰からの依頼だ？」

セリルは声を抑えたまま静かに言う。

「国王からです」

「国王お？」

そんな大層な人物に借りを作った覚えないんだけどな。まさかあの爺の差し金か…？

「詳しい話はここを出てからにしましょう。しっかりと彼女と自分の身を守って下さいよ？」

そう言ってセリルはどこから取り出したのか、俺の刀と妹の小太刀を手渡してくる。

「アンタにも見せてやるよ、柳葉無刃流」

セリルに負けじと不敵な笑みを見せつけ、鍵の開いた扉を抜ける。

「フル、手当てはどうだい？」

「バッチリだよマスター！」

ネコ少女、フルは鉄の格子を爪で切り裂いて牢屋から出る。

「マスター？」

「フルと私は主従関係にあるんだ。まあそこら辺も後で詳しく話してあげるよ」

フルに続いて出てきた彼女は戸惑っている様な顔でキョロキョロしている。

「私はセリル嬢グネース」

「フルだよーセリル様の従者あ」

「柳刃 仁だ」

セリルに続いて簡潔な自己紹介をする。そんな状況に鳥人の少女はこう言った。

「アンジェ…です」

その時見せた少女の笑顔はとても美しく、可憐なものだった。

牢獄での出会い（後書き）

書いてて楽しい…！

けど自分の妄想力に文才がついていけない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5854y/>

混ぜられたセカイ

2011年11月21日11時35分発行